

## 尾崎紅葉の初期作品群にみる古典詞

……『源氏物語』『伊勢物語』『徒然草』……

島内景二

## 1 はじめに

尾崎紅葉（一八六七—一九〇三）、本名は徳太郎、半可通人・十千万堂とちまんじやうなどとも号した。彼が中心となつて結成した「硯友社」は、我が国最初の文学結社だった。代表作には、『金色夜叉』『不言不語』『多情多恨』などがある。

尾崎紅葉の作品は、現代人に必ずしも読まれているとはいえない。「明治の文豪」という言葉で一般人が連想するのは、夏目漱石・森鷗外・島崎藤村・田山花袋たちであっても、残念ながら尾崎紅葉ではなからう。子孫が活躍している幸田露伴と比較しても、尾崎紅葉の知名度は低い。「紅露道鷗」と並び称された四人（尾崎紅葉・幸田露伴・坪内逍遙・森鷗外）の中で、現在最も忘れかけられているのが、紅葉であろう。ところが、混迷する現代文学の閉塞状況を打破するヒントを最も豊富に含んでいるのが、尾崎紅葉だと思われる。「純文学」と「大衆文学」あるいは「中間小説」というジャンル分けのなかった混沌とした文学的状况の中で、紅葉は「読んで面白い、読者を引き付ける」作品群を量産した。歴史小説あり、現代小説あり。しかも、文体は『源氏物語』を思わせる文語文（擬古文）から近代的な「である」体まで、実にバリエーションに富む。同じ小説の内部でも、地の文と会話文とで文体を違えるなどの工夫もなされている。

わたしは、尾崎紅葉の近代文学の根底に『源氏物語』などの王朝物語の読書体験があることを指摘し（『源氏物語の影響史』笠間書院・平成十二年）、はなはだ文体的魅力に富む作品群が「歴史小説」の始祖として位置づけられることをも指摘した（『復活する尾崎紅葉』、『歴史読本』平成十二年六月号）。紅葉は、『源氏物語』などを典型とする一流の「フィクション」を意識して、自らの文学世界を作り上げていったのではなかったか。ストーリー、人間関係、言葉などの点で、

紅葉文学と古典文学とは響き合う。

本稿では、古典的骨格と現代的斬新さとを併せ持つ紅葉文学の成立の秘密に具体的に迫りたい。その方法論として、尾崎紅葉の初期の小説群における古典文学摂取の軌跡を細かく辿ることを試みる。その結果、表現と主題の両面において、近代文学成立を促した「古典の教養」の実質が解明されるのではなからうか。『源氏物語』に由来する「源氏詞」、『伊勢物語』に由来する「伊勢詞」、『古今和歌集』『新古今和歌集』などに由来する「歌ことば」、そして本稿における造語であるが『徒然草』に由来する「徒然草詞」などを、一つでも多く発掘したいと考えている。それらの古典文学に由来する言葉を総称して、「古典詞」と呼びたい。

なお、引用する尾崎紅葉の作品の表現は、最も新しい岩波書店刊の『紅葉全集』（全十二巻・別巻一巻）に従う。ただし、どうしても印刷できない特別な記号は、やむをえず通行のものに変更せざるをえなかった。また、引用文の「ルビ」は、必要不可欠なもの以外は省略したこともおことわりしておく。

本稿で考察の対象とした初期作品は、『紅葉全集』の第一巻と第二巻に収録されたものである。第一巻には二十四編、第二巻には十一編の小説が収められているが、本稿ではその中からおおよそ三分の一を取り上げる。その選択基準は、一見して古典詞がわたしの目に飛び込んできたかどうか、である。今回取り上げることのできなかつた初期作品にも、熟読すれば古典文学の影響を蒙った痕跡が発見できる可能性は残っている。

## 2 『二人比丘尼色懺悔』

## 2・1 梗概

戦国時代と思われる時代に、一人の若武者がいた。両親と早くに死別し、隣国

の伯父夫婦に養育された。そこには、従妹にあたる幼なじみで、心掛けのよい美少女がいて、二人は相思相愛の仲だった。やがて若武者は元服し、生国に戻って父の跡を継ぎ、武士として殿様に仕えた。ところが、この殿様の奥方に宮仕えしている心掛けのよい美女が、若武者に恋慕した。殿様と奥方の意向を拒み得ず、若武者と女性は夫婦となった。この結婚の直後に、若武者の生国と、伯父の住む隣国とが戦を起した。

若武者の生国は、滅亡。若武者は負傷したが、敵の立場の伯父に養われ、恋しい従妹から心変わりをなされるが、結局、自害してしまう。彼を愛した二人の美女は、それぞれ独自に剃髪して尼となる。一人の男を愛した二人の尼が、ある夜に偶然出会うことになった、という奇しき因縁が、この小説の趣向である。

「女から愛される男」を描いているのは、紅葉の想定している読者層が「恋愛に憧れる女性」だからであろうか。ちなみに、森鷗外の妻・しげも紅葉の小説を耽読していたという。鷗外としての長女である森茉莉のエッセイ「奈良の木彫籬」(『森茉莉全集・第七巻』所収、筑摩書房)に、その旨の回想がある。しげは、厳父(大審院判事)から小説を読むことを禁止されていたが、こっそり紅葉の小説だけは読んでいた。だが、紅葉の小説に描かれている「男の感じ」に飽き足らなかったとも書かれている。これは、紅葉が「女に愛される好漢」を大前提としてその恋愛の成就と非成就とをクライマックスとしてストーリーを構築したことのプラス面とマイナス面とを照らし出すものだろう。しげのような女性が、紅葉文学を支えていたのであり、やがて紅葉文学から離れていったのだろう。

## 2・2 「むさしあぶみ」

以上の梗概から明らかのように、「二人の美女から愛され、どちらにも愛情を感じて、心を引き裂かれる男」という人間関係(三角関係)が、『二人比丘尼色懺悔』の根幹にある。これは、『伊勢物語』一三段の「むさしあぶみ」の章段と一致する人間関係である。都に愛する女性を残してきた男が、旅先(滞在先)の関東で新しい女を愛してしまう。その板挟みの苦悩が、「むさしあぶみ」という二股かけねばならぬ馬具に仮託して表現されている。この『伊勢物語』の「むさしあぶみ」の人間関係は、『源氏物語』明石巻で、光源氏・紫の上・明石の君の三人の人間関係として、さらに長編化されて展開する。

と同時に、「幼なじみの男女の恋愛」いう点で、『二人比丘尼色懺悔』が『伊勢物語』二三段の「筒井筒」の人間関係を踏襲していることも知られる。

尾崎紅葉が、満二十二歳の時に発表した野心作『二人比丘尼色懺悔』は、何よりも『伊勢物語』の影響下に発生したことが知られるのである。それは、一三段と二三段という二つの章段を合成することで、作品の骨格が形成されたことを示すものであった。

## 2・3 「峯の松」

若武者の妻となった方の女性が尼となって暮らす山里の描写は、次の通り。

晨から夕まで昨日も今日も木枯の吹通して。あるほどの木々の葉―峯の松ばかりを残して―大方をふき落としたれば。山は面瘡せて哀れに。森は骨立ちて凄まじ

句読点やダツシユ・リーダーは、原文のままである。尾崎紅葉が「王朝物語の擬古文」に依拠しつつ、文末表現の工夫によって「擬古文臭さ」を消そうとした文体の苦心が印象的である。

さて、この部分には、『新古今和歌集』巻六・冬・五六五・祝部成茂の、

冬のきて山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峯にさびしき

が取り込まれている。この和歌は、『徒然草』一四段では、

新古今には、「残る松さへ峯にさびしき」といへるをぞ、(歌屑と)いふなるは、まことに、少しくだけたる姿にもや見ゆらん。

と批評されている。おそらく、尾崎紅葉は『徒然草』經由で、『新古今和歌集』の祝部成茂「残る松さへ峯にさびしき」の古歌を記憶したのではなからうか。そう考えれば、『二人比丘尼色懺悔』のこの冒頭近辺に、

谷陰に誰が住む庵。(中略)其処に筧の水……水ほどにもなく絶えぬ雫。閑伽桶に滴る音。やうく幽に疎らになるは。樋の口凍るにや一夕暮の風寒し。

とあるのも、『徒然草』一段の、

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる筧の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに、住む人のあればなるべし。

という箇所を意識的に踏まえたものではないかと思われる。『二人比丘尼色懺悔』に、「庵」「筧の水」「雫」「閑伽」「樋」などの『徒然草』一段と共通する語彙が見られるのも、あるいは偶然ではないのかもしれない。『徒然草』一段は「神無月」という初冬の日の体験を描いているが、『二人比丘尼色懺悔』も冬の庵の出来事を描いている。

国文学研究の必要上、後世に影響を与えた『源氏物語』の語句を「源氏詞」と言い、後世に影響を与えた『伊勢物語』の語句を「伊勢詞」と言う。ならば、『二人比丘尼色懺悔』には、数々の「徒然草詞」がちりばめられていると言っても過言ではなからう。

## 2・4 「黒木」

尼の庵には、入口のしるしとして、『二本の黒木』があったという。「黒木」と言えば、『源氏物語』賢木巻で光源氏が分け入った嵯峨の野の宮の「しるし」の鳥居でもあった。尼の庵は、六条御息所の住む野の宮と比較すればあまりにもみすばらしいものだが、「黒木」が源氏詞であるという事実をここで指摘しておくきたい。この尼には、優雅と落魄を体現した六条御息所のイメージがあるということだ。

ちなみに、賢木巻では嵯峨の晩秋の一日を描いていたが、『二人比丘尼色懺悔』では冬の一日に変更されている。

## 2・5 庵主の「軒」

旅の尼が、この庵に一泊することを求めた。庵主の尼は、それを許した。その夜の描写。

微かなれど耳につく主人の軒あまのしほ。

この「軒」は、決して大きなものではない。尾崎紅葉は、人々が立てる微かな寝息のことを「軒」と表現する癖があったようだ。いろいろな作品に、「軒」という言葉が使われているが、「下品」という雰囲気はない。

ただし、「尼の軒」ということで、わたしたちは『源氏物語』手習巻を連想せざるをえないだろう。出家を決意している浮舟の耳に、大尼君の猛烈な「軒」の声が開こえてくる。それが、浮舟に一層世の中を厭う心を増大させる。

ここでは、一人の尼がもう一方の尼の軒を耳にしている。「尼の軒を聞く」という趣向は、もしかしたら、『源氏物語』から尾崎紅葉が学んだ「場面設定」なのかもしれない。

## 2・6 「筒井筒」

軒をかいていた庵主の尼も目覚め、ずっと眠れなかった旅の尼と話をし始める。二人の尼の語らいを記しているうちに、いつか場面は転換して、若武者の生前の回想へと移る。

読者は、なぜ若い美女が二人とも尼になってしまったのか、そしてこの二人の尼の間にはどのような不可視の糸が結ばれているのか、興味を持って読書してゆくことになる。「歴史小説」の中に「謎解き」の要素を導入した「サスペンス小説」の趣である。

若武者（小四郎）は、今は敵となった恩人の伯父と、偶然に合戦場であいまえた。伯父は、深手を負った若武者を家に連れ帰って匿う。そこに、幼なじみの従妹（芳野）が現れ、自分を見捨てて腰元（若葉）と結婚したことを恨む。種明かしをしておけば、この芳野が「さすらう尼」であり、若葉が「庵の主の尼」なのである。さて、この場面に、

芳野といへば筒井筒。振分髪うらみかみの許婚。

という文章がある。むろん、『伊勢物語』二二三段に由来する「伊勢詞」である。『伊勢物語』二二三段では、幼なじみの男女は結婚した。それに対して、『二人比丘尼色懺悔』では結婚できない。ストーリーを「反転」したかたちで、尾崎紅葉は『伊勢物語』二二三段を引用している。「筒井筒」「振分髪」という二つの有名な「伊勢詞」の明示は、作者が読者に向かって、自分の作品の「種明かし」構想の

提示」をしていることを意味している。後の場面にも、「筒井筒の芳野を思はぬにあらねど」という箇所がある。

ちなみに、これに先立って、若武者が敗戦を嘆く場面に、「足すり」という『伊勢物語』六段に由来する「伊勢詞」も用いられている。『むき玉子』にも「早くくと足摺して急立つれど」という一節があり、「足摺」という伊勢詞を使っているが、ここには『伊勢物語』六段の雰囲気はまったくくない。『二人比丘尼色懺悔』の「足すり」は悲嘆・切歯扼腕という点で『伊勢物語』六段の世界の雰囲気や面影取りしているが、『むき玉子』では単なる言葉の切り出しになっている。

## 2・7 二人妻

若武者の小四郎にとつて、芳野は結婚してはいないものの「心の妻」であり、腰元の若葉は現実の妻である。二人の妻の間で引き裂かれた小四郎の自害を語る「自害の巻」の冒頭には、次に掲げる三行の題目が掲げられている。

吉野は春若葉は夏

われは世を秋の

露の命の事

「世を秋の露」は、「世を飽き」と「秋の露」との懸詞である。和歌的なレトリックであるが、謡曲的と言ってもよからう。

幼なじみの美女「吉野」芳野は、小四郎にとつての春という人生の季節（少年期）の素晴らしさの比喩（吉野＝芳野は、桜の花の名所）である。結婚した「若葉」は、小四郎にとつての夏という人生の季節（青壮年期）の素晴らしさの比喩（花が散って、桜は若葉となる）である。そして、小四郎の自害は、秋という人生の季節（晩年）の比喩（桜の葉も、秋に色づき、やがて凋落する）となっている。『二人比丘尼色懺悔』巻頭の蕭条たる「冬景色」は、冬という人生の季節（愛する人に先立たれた荒涼たる余生）の比喩だったのである。巻頭部の、葉をすべて落とした冬の枯木の描写は、実に意味深長なものがあつたのだ。

人生の種々相を「春夏秋冬」の四季を擬人化して、この小説は書かれている。この「四季の美学」こそは、春夏秋冬の四季をすべて具現した光源氏の居宅・六条院の描写として、『源氏物語』の玉鬘十帖で入念に描き込まれていたものであ

る。

「春の芳野」と「夏の若葉」の二人の美女に引き裂かれた若武者の苦悩は、例えば「春の紫の上」と「冬の明石の君」との二人に引き裂かれた光源氏の心中とも通い合う。当然、『伊勢物語』一三段の「むさしあぶみ」の男とも共通する。ただし、この「二人の女から愛される一人の男」という三角関係を明示する「伊勢詞」や「源氏詞」は見当たらない。「筒井筒」が顕示された引用であつたのに対して、「むさしあぶみ」は隠された引用なのである。「古典詞の引用」と「構造・話型の引用」とは、明瞭に次元が異なっているのだ。「筒井筒」は「構造・話型の引用」を証明する「伊勢詞」が痕跡として残されていたが、「むさしあぶみ」の方は「構造・話型の引用」を証明する「伊勢詞」が手掛かりとして残されていない。痕跡が表現として残されていない「構造・話型の引用」をどこまで評価するか、そこが研究の分岐点だろう。

一般的に、近代文学の研究者は、痕跡が残っていない「話型の引用」に関しては厳しい認定を下す傾向にある。しかし、古典文学を専門とする研究者の視点からすると、「話型の引用」が嗅覚として強く感じ取られる場合がある。『二人比丘尼色懺悔』における「むさしあぶみ」が、まさにそれなのだ。

## 2・8 読後感

この小説を読み終えたあとで、読者の心に残るのは若武者・小四郎の「二人の女性から愛された／二人の女性を愛した」ことの結果としての苦悩の大きさである。二人の尼たちは、自分たちが一人の男を心の底から愛していたことを知る。その後日譚について、作者は何も触れない。不倶戴天の敵として罵り合ったのだろうか。否、二人の尼は、今となってはすべての恩讐を捨てて、『源氏物語』の紫の上と明石の君とが和解したように、心のわだかまりをなくしたことであろう。そして、二人で尼としての共同生活をつづけたのではないか。『平家物語』で、祇王・祇女のもとを訪れた仏御前のような感じである。

最後に、『二人比丘尼色懺悔』の巻頭に『徒然草』が引用してあつたことを思い返したい。すると、「世の人の心惑はずこと、色欲にはしかず」（八段）、「まことに、愛著の道、その根深く、源遠し」（九段）、「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ」（一九〇段）などの『徒然草』の名文句の数々が、読者の脳裏を去来することだろう。

尾崎紅葉の出世作『二人比丘尼色懺悔』は、『徒然草』と『伊勢物語』の二つ

を根幹として、若干の「源氏詞」を加味して作り出された近代小説だったのである。

### 3 『風雅娘』

#### 3・1 「自序」・その一

『風雅娘』には、俳句に全身全霊を打ち込む女性の姿が、やや戯画的に描かれている。言わば「コメディイ小説」である。尾崎紅葉は、ほほえましいコメディイ小説作家としても出色であった。その巻頭に、「自序」が載っている。

隣家に住む大俗物、何時植たりけむ、此頃そのあやしき垣根に、ほのく見つけしは花の夕顔、白露の照添ふ色あはれに覚え、よりにこそ見めと、庭口よりをち方人に物申といふに、手がふさがりたりとわめく。いや私で御坐る。是はく。扱も近頃やさしき御心かな。五条の隠家のみやびをやら、わと申せば、糸瓜よりは、干瓢にして少しは銭になればと答ふ。

今とりあえず「読点（、）」で引用した文章は、原文では「、」の部分对白抜きされた「読点」で打たれている。

この部分は、一読して明らかのように、『源氏物語』夕顔巻に依拠して書かれている。小学館・新編日本古典文学全集『源氏物語』第一巻の夕顔巻本文を示しておこう。

五条わたりの御忍び歩きのころ、……。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にも申す」と独りごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。

(女) 心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

(光源氏) 寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔

『風雅娘』の「糸瓜」「干瓢」の件りは、植物名「夕顔」からの連想の糸なのである。

#### 3・2 「自序」・その二

『風雅娘』の「自序」には、「俄に思ひ立ち、猿沢の池へ藻の花見にまかればと、暇乞もせはしく出て行く」という一節がある。

ここは、『大和物語』一五〇段や、『拾遺和歌集』卷二〇・哀傷・一二八九で有名な柿本人麻呂の、

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき

を引用している。

#### 3・3 「自序」・その三

『風雅娘』という作品は、江戸時代を時代背景としているが、現代の学問に熱心な婦女を風刺したものである。歴史小説の体裁を借りた現代小説なのである。その創作方針（創作意図）については、「自序」の中でも、

今は昔爰に風雅娘と書しは、玄宗の世に。漢皇重色と歌ひしにならひて今の物学お嬢様や。

と記されている。「自序」の後には、いよいよ本文が始まるが、「今は昔となりぬ」と書き起こされている。各種の王朝物語や『今昔物語集』などの冒頭が「今は昔」である事実と照応するものである。と同時に、「今は昔」という物語の第一声を紅葉が、「今の出来事を過去に移し替える」という意味で理解していたことが知られる。

紅葉は、『長恨歌』の「漢皇重色」という書き出しが、唐の時代（作者である白楽天にとつての現代）を漢（白楽天にとつての過去）に移し替えたものであるという文学的伝統を踏まえて、そう言っているのだ。『伊勢物語』の「昔、男ありけり」の「昔」が、在原業平の生きていた時代（今）を過去に移し替えたものであるという理解がされてきたこととも関連しよう。

## 3・4 鹿笛

この小説のヒロインは、誹諧の風雅に心を尽くしている「お千代」という娘である。彼女のことは、冒頭部分で、

世を秋深き山奥に、鹿笛しかふえの稽古しきこもがなと、風雅ふうがにねぢれしお千代とて、名代の誹諧はいがい娘むすめ。

と紹介される。「世を秋深き」の部分には、「世を飽き」と「秋深き」との懸詞が使われており、いかにも和歌的な修辭技法である。なお、『二人比丘尼色懺悔』でも、この懸詞は使われていた。

さて、この「鹿笛」については、『徒然草』九段の、

されば、女の髪すぢを繕とれる綱なわには、大象もよくつながれ、女の履ける足駄あしだにて作れる笛ふえには、秋の鹿しか必ず寄るとぞ言ひ伝へ侍る。

とある箇所との関連が想定されよう。『徒然草』が尾崎紅葉の念頭にあったことは、『二人比丘尼色懺悔』を加味すれば確実な推論となる。『徒然草』九段では、男女の恋愛への執着心が「鹿笛」で象徴されているのに対して、『風雅娘』では、女性の文学への執着が「鹿笛」で象徴されている。

## 3・5 喚子鳥

やがて、お千代に求婚する男性が二人登場する。一人は武士で、一人は商人である。そのうちの二人目の説明。

今一人は尺蔵しゃくざうと喚子鳥よびこどり、猿屋町さるやまちに名だ、る呉服屋の二番息子。

「尺蔵と呼ぶ」と「喚子鳥」の懸詞は、すぐに理解できよう。ただし、地名の「猿屋町」を表現に呼び込んでくる導入として、なぜ「喚子鳥」が機能しているかは、ある程度の古典文学の知識がないと理解できない。

紅葉の愛読書であったと思しい『徒然草』二二〇段には、

「喚子鳥は春のものなり」とばかり言ひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。

という記述があるが、ここには「喚子鳥」鶴つるという説が展開されているのみである。紅葉は、『徒然草』経由ではなくて、おそらく『古今和歌集』の知識を用いて、この表現を紡ぎ出したのだろう。『古今和歌集』巻一・春上・二九・読み人知らずに、

をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも喚子鳥よびこどりかな

という和歌がある。この「喚子鳥」が何を意味するかについては、さまざまの「秘説」が乱舞しており、中世では「古今伝授三鳥」の一つとすらなっていた。この諸説の中の一つとして、「喚子鳥」猿さるとする説があったのである。それゆえ、「喚子鳥」が「猿屋町」の「猿」を呼び出す枕詞のような機能を發揮できたのである。

紅葉が、直接に『古今和歌集』二九番歌の知識を活用したと考えてもよいし、『古今和歌集』の秘説を取り込んだ謡曲などの詞章を紅葉が利用したと考えてもよからう。けれども、その淵源が『古今和歌集』にあることは確かである。

## 3・6 「答へぬ山」

強力なライバルの出現に焦った尺蔵は、お千代に必死になって求愛するが、彼女はよい返事をくれない。その尺蔵の嘆きを叙した文章に、

答へぬ山はあらじと思ふに、扱さもつらきは御心ごしんもじ。

という箇所がある。男の呼びかけに、女が答えてくれないことを嘆く男の気持ちこころが描かれている。ここには、『古今和歌集』巻一・恋一・五三九・読み人知らずの、

うちわびて呼ばはむ声に山彦の答へぬ山はあらじとぞ思ふ

という和歌が引用されている。

ところで、『源氏物語』夕顔巻は、この小説の「自序」で引用されていたものだが、この巻で夕顔が急死する場面がある。その中に、

「我、人を起こさむ。手叩けば山彦の答ふる、いとうるさし」

という光源氏の言葉がある。北村季吟の『湖月抄』などは、この『源氏物語』本文が『古今和歌集』の、

うちわびて呼ばはむ声に山彦の答へぬ山はあらじと思ふ

を引歌して書かれていると指摘している。尾崎紅葉は、『古今和歌集』それ自体を通して「答へぬ山はあらじ」という歌ことばを知っていたのではないかと思われるが、『源氏物語』夕顔巻の読書体験を経由してこの和歌の存在を知っていたとも推測される。

### 3・7 「筑摩鍋」

尺蔵は、めでたくお千代と祝言をあげた。ところが、新枕の段になっても、お千代は彼との同衾を拒む。男は、妻への疑惑と嫉妬に駆られる。

筑摩鍋重ぬる恥辱を面目なしとて、今宵新枕の床を白露の置所。潔く白害と  
きはめし下心か。

尺蔵は、かつて自分とお千代を争った求婚者が既にお千代と深い仲になっていたのではないか、お千代は二人の男と同衾することを恥じて自害するのではないかと、疑心暗鬼に駆られているのだ。

この部分は、『伊勢物語』二二〇段の、

近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の敷見む

を引用して書かれている。筑摩神社の祭礼に参列する女性は、自分が関係した男性の数の鍋を頭にかぶらねばならないという習俗がある。尺蔵は、お千代が「二つの鍋」をかぶるのを恥じている、と誤解しているのだ。

### 3・8 「天さがる鄙」

男の邪推に、妻のお千代は反発する。彼女は、風雅に命を献げているから「ほととぎす」の初声を聞きたい一心なのだ。お千代は、夫を、「天さがる鄙び根性のお方」と非難する。

これは、「天さがる鄙」と「鄙び根性」との懸詞である。「天さがる鄙」については、『万葉集』に類出する歌ことばであることを指摘しておきたい。『万葉集』に典拠を持つ和歌が、例えば『新古今和歌集』巻十・羈旅・八九九・柿本人麻呂、あまさがるひなの長路を漕ぎくれば明石の門よりやまとしま見ゆ

### 3・9 「かくとだに」

お千代が自分以外の男を思っているのではなく、風雅の道に心を入れて、ほととぎすを待っているのだと知った尺蔵は、安心して眠り込む。

いつか傍若無人の高野。(中略) また野かくとだに得やは約束せじ。

「野かく」と「かくとだに」の懸詞である。この部分に関しては、『百人一首』で有名な、『後拾遺和歌集』巻一一・恋一・六一二・藤原実方の、

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじなもゆる思ひを

の引用であることが明瞭である。この藤原実方の歌では、「えやは言ふ」と「伊吹山」との懸詞が眼目であった。

尾崎紅葉は、「かくとだにえやはいぶきのさしも草」という和歌の「いぶき(伊吹)」という部分から発音の類似する「いびき(野)」を連想し、その「いびき」の縁語として「かく」を意識した。それが、『風雅娘』の表現を生み出したのだ。

## 3・10 「比翼の鳥」

尺蔵とお千代は、ほととぎすの声を待ちながら、夜着にそれぞれが片手を通して、男女の契りこそないものの、ほほえましい初夜を終えた。その寝姿が、

これぞ地にある比翼の鳥。天に在る奴めはまだかと、言ふさへ寐惚声。ねぼけこゑ

と叙述されている。この部分は、「自序」で引用されていた『長恨歌』の、

天に在りては願はくは比翼の鳥となり、  
地に在りては願はくは連理の枝とならむ。

の引用である。

## 4 「口惜きもの」

## 4・1 幼なじみの男女

『口惜きもの』は、ごく短い作品である。『枕草子』の「もの尽くし」章段にヒントを得たと思われる。初出時のタイトルは『犬枕』であり、作者の署名は「青少納言」だったという。ちなみに、尾崎紅葉の初期作品には『猿枕』もあり、「すさまじきもの」「あさましきもの」の二つを描いている。清少納言が「随筆」ジャンルで行った方法を、紅葉は「小説」ジャンルで試みている。

さて、『口惜きもの』は、かつて寺小屋で席を同じうした少年・少女が、およそ十年ぶりにすれ違ってみると、男はしがない生活（文士稼業）をしているのに対して、女は高官の奥方と思われる幸福な結婚をしていた、というお話。

『伊勢物語』二三段の「筒井筒」を裏返しにしたアンハッピーエンドである。ただし、余裕のあるコメディ・タッチであるので、悲壮感はない。また、「構造・話型の引用」であるので、「明瞭な古典詞の痕跡」が指摘できない。しかし、尾崎紅葉が『伊勢物語』二三段を愛好していることは他の作品との響き合いによって明白であるので、『伊勢物語』二三段の隠された引用を読み取ることは容易である。

## 4・2 「指を折る」

偶然に幼なじみの女性と再会した男は、何年振ぶりを計算する。

指折つて見れば早十ばかりも松飾を仕替へぬ。はやく

小説の冒頭部に、「世の中に口をしと思ふもの、一々指を折らば尽くさむこと難し」とあるので、そことの照応とも考えられる。だが、『伊勢物語』一六段に挿入されている、

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり

を意識しているとも考えられる。

なお、この「すれ違い」の場面だが、貴顕の妻となった女は「黒塗」の俥に乗っていた。貧乏な男は、それを下から仰ぎ見るのみ。この男女の構図は、『大和物語』一四八段の「蘆刈」の歌語りと共通する。ちなみに、『大和物語』一五〇段が、「猿沢の池」の歌語りであり、紅葉は『風雅娘』の自序で引用していた紅葉の脳裏には、あるいは『大和物語』一四八段の「蘆刈」があったのかもしれない。

## 4・3 「思ひ出したり」

男は、すれ違った奥方が、確かに幼なじみの少女だったことを思い出す。その場面に、

思ひ出したり。あの女はその時の小娘。

とある。謡曲にしばしば用いられる表現に、「思ひ出でたり」がある。

思ひ出でたり、夜遊の曲。（『雲林院』）

などである。尾崎紅葉の謡曲への親炙が、このような表現を生み出したとは考えられないだろうか。何げない表現の中にも、古典文学の影響力が揺曳しているの



である。

#### 4・4 杜牧

この短編小説の最後には、「これを思へば杜牧といふ男も、かうした事を二十八字につらねたりき」という、作者の述懐がある。これは、この小説の「構想」の種明かしと言ふべきだろう。

『唐才子伝』によれば、杜牧は若い頃に湖州で一人の少女と出会い、十年後を約束して別れた。十四年後に、その州の刺史として杜牧が赴任してみると、その少女は既に人妻となっていた、という。その際に詠まれたのが、杜牧の七言絶句（二十八文字から成る）だという。

#### 山行

杜牧

遠上寒山石徑斜

白雲生處有人家

停車坐愛楓林晚

霜葉紅於二月花

この杜牧の漢詩「山行」が、この小説の典拠であるということが明示されている。ただし、表現的には、この漢詩（および『唐才子伝』所収のエピソード）以外にも、さまざまな古典文学の重力が感じられるのである。たとえば尾崎紅葉が『唐才子伝』によって大まかな構想を得たとしても、それに具体的な肉付けを与えたのは、むしろ日本の古典文学の方であつたらう。

### 5 『南無阿弥陀仏』

#### 5・1 梗概

大阪で、一人の乳母が、実母に先立たれたいたいな姉弟二人を、邪険な継母から必死に庇いつつ育てている。しかし、やむない事情で乳母は東京へ帰らねばならなくなり、涙の別れとなる。大阪に残された姉妹は、肺病を患っているが、文字の書けない乳母の手紙を代筆する乳母の甥の人柄に引かれ、彼に「見ぬ恋」をして、夭逝してしまう。

この乳母の甥から実際に伝聞した体験を、紅葉が一編の小説に仕立て上げたとする断り書きが、冒頭に載せられている。

#### 5・2 「千代もと祈る人の子のため」

大阪に残った「お梅」と、東京に移った乳母の「よし」。「よし」は、「お梅」の肺病の回復を祈って、東京の神社仏閣を歴訪する。そのけなげな心を、小説作者は次のように説明している。

千代もと祈る人の子のため——世間の乳母の心を読まれしものか。浅草の観世音、深川の不動尊、神田明神、湯島天神、仏ともいはず神ともいはず、路端の古祠、霞隠れの千木、いづれもおろそかにせず伏拝む、わが身の息災延命にはあらで、お梅様の病氣何卒一度平癒なさしめたまへと、乳母のよしは東京へ帰つても、以前にかはらぬ志、聞くもの感涙に袖を濡らしぬ。

まず、この部分に内在する明らかな引用として、『伊勢物語』八四段がある。長岡京に残った母を思う平安京の官僚の息子の歌。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため

『伊勢物語』八四段では、離れた場所で暮らす老母をいたわった息子の歌である。この和歌を引用しつつ、尾崎紅葉は「母親がわりの乳母が、遠く離れて暮らしている若君を心配する」という人間関係に組み替えた。この「組み替え」を可能にしたのが、紅葉の『徒然草』四七段の読書体験ではなからうか。

ある人清水へ参りけるに、老いたる尼の行き連れたりけるが、道すがら、「くさめくさめ」と言ひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほ言ひやまざりけるを、たびたび問はれて、うち腹立ちて、「やや、鼻ひたるとき、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡山に稚児にておはしますが、ただ今もや鼻ひたまはんと思へば、かく申すぞかし」と言ひけり。

ありがたき志なりけんかし。

「清水寺」参詣の途中、乳母が自分が養った若君のことを心配しつつづけるようすを、「ありがたき志」と、兼好は述べている。『南無阿弥陀仏』には、「くさめ」

という文字はないものの、人間関係（乳母と養君）と状況（神社仏閣詣で）とが対応関係にあり、「隠された構造の引用」として『徒然草』四七段が指摘できると考えられる。「くさめくさめ」とは、「息災万命」のつづまったかたちとされ、『南無阿弥陀仏』の「わが身の息災延命にはあらで」という箇所も、『徒然草』注釈書には必ず言及されている「息災万命」からの連想だったかとも思われる。「くさめくさめ」は、厳密な意味での徒然草詞ではないが、徒然草詞的なものだとは言えよう。

### 5・3 「玉の緒の絶かねまじき」

肺病を患っているお梅は、乳母からくる手紙を代筆している青年に「見ぬ恋」をする。その場面に、「さもなくても玉の緒の絶かねまじき身にして、恋とは何事」という一節がある。ここには、『百人一首』で有名な、『新古今和歌集』巻一・恋一・一〇三四・式子内親王の、

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへばしのぶることの弱りもぞする

が引用されている。肺病によって、ただでさえ「絶え」てしまいそうなお梅の「玉の緒」命なのに、「見ぬ恋」によって彼女の「玉の緒」がいつそう「絶え」てしまいうさだ、という意味を紅葉は込めているのだ。

『新古今和歌集』の詞書によれば、この式子内親王の歌は「忍ぶる恋」という題で詠まれたものだという。詠歌状況を含めて、紅葉は引用しているのだ。

### 5・4 「見ぬ恋」

『南無阿弥陀仏』の作者は、お梅の恋を「全くの見ぬ恋。見ぬ恋とか」と説明する。『新古今和歌集』や『六百番歌合』などで、しばしば見かける「見ぬ恋」という歌題を、紅葉は巧みに現代小説の中に取り組んでいる。

一体に、尾崎紅葉は「現代風俗を過去の歴史的情景に移し替える」という手法を用いることがあった。その一方で、紅葉は「過去の古典詞の生命力が喚起するイメージを現代小説に吹き込む」という手法を愛用したのである。「現代を過去へ」「過去を現代へ」という二つの交叉する方法論を、紅葉は駆使している。

### 5・5 「ありとても」

『南無阿弥陀仏』は、「其一」から「其四」までの四つのパートからなる。その「其三」の冒頭に、

ありとても逢瀬も知らぬいのちをば何の頼みになほ惜しむらん。

という一文がある。小説の巻頭にレトリックの凝った名文を配置するのは、王朝物語以来の鉄則である。だが、この文章は指を折って数えてみると、「五七七七」の音節から構成されており、和歌の引用であることが知られる。索引で調べると、『玉葉和歌集』巻二三・恋五・従一位教良女の、

ありとても逢瀬も知らぬ命をば何の頼みになほ惜しむらん

という和歌があることが判明する。尾崎紅葉は、この『玉葉和歌集』の恋歌を『南無阿弥陀仏』の中にさりげなく挿入しているのだ。

「逢ふ世」が「逢瀬」となっているのは、紅葉が読んだ『玉葉和歌集』の表現がそのように表記されていたからだろう。何らかの恋歌のアンソロジーの中でそれを知ったのか、あるいはこの和歌を引用した文学作品の読書体験を通して知ったのか、詳らかにはいえない。

### 5・6 「冠を懸けし宰相の門」

頼みとする乳母に去られた姉弟の寂しい生活ぶりや、詳しく描かれる。昨日までは、それでもいろいろな人が訪れたり言葉をかけたりしてくれたのに、今は継母の権力をはばかって誰も訪れてくれる人はいなくなったのである。そのありさまは、

冠を懸けし宰相の門に似たり。

と喩えられている。「門前雀羅」でも、「掌を返す」でもよさそうなのであるが、尾崎紅葉は「冠を懸く」という喩えを用いている。この出典は、『蒙求』の「逢萌挂冠」である。後漢の人・逢萌は、皇位を篡奪した新の王莽に仕えることを潔しとせず、冠を城門に懸けて逃れた。この故事から、官を辞すことを、「挂冠」

「掛冠」「解冠」などと称するようになった。夏目漱石にも、冠を掛けて柳の緑かな

という俳句がある。これは、五柳先生と呼ばれた陶淵明の官職を辞したあとの隠遁生活を諷んだものである。

さて、この「逢萌掛冠」の故事を、尾崎紅葉はどこから知ったのであろうか。むろん、「蒙求」は有名な書物であるから、直接に「蒙求」を読んだことも十分に推測される。だが、今一つの推測をも、ここで述べておきたい。「源氏物語」若葉下巻に、柏木が父親について言及する場面がある。柏木の父親は、かつて頭中将と呼ばれた光源氏のライバルであり、太政大臣まで登り詰めたが、今は「致仕」している。この「致仕の大臣」について、柏木は、

冠を掛け、車を惜しまず捨ててし身にて、

と語っている。「紫明抄」や「河海抄」などの『源氏物語』古注釈書は、この箇所を「逢萌掛冠」の故事を詳しく指摘している。「宰相の門」という「南無阿弥陀仏」の表現から推測して、「致仕の大臣」に関する『源氏物語』注釈書から得た知識ではないかとも思われるのである。むろん、「源氏物語」を経由せずに、直接「蒙求」を読んだ可能性の方が高いであろう。ただし、そこからは「宰相の門」という表現は生まれてこなかったはずである。

### 5・7 文

肺病という身体の病と、見ぬ恋という心の病の相乗によって、お梅の命は細りに細ってゆく。病臥するお梅の枕許には、弟の由之助がいる。そして、乳母の甥である上野兼次郎からの手紙（上野の写真も入っている）を待ち侘びている。臨終の場面で、やっと届いた上野からの手紙を由之助が姉に手渡したとき、お梅の細い玉の緒は絶え果ててしまった。

全体的な雰囲気としては、『伊勢物語』四五段の、深窓の令嬢が在原業平に「見ぬ恋」をして臨終に陥り、業平が駆けつけたときには絶命していた、というストーリーと類似している。もし紅葉が『伊勢物語』四五段を執筆中に意識していたとすれば、「隠された構造の引用」ということになる。

また、弟が男からの手紙を姉に手渡すという趣向は、『源氏物語』で何度か用いられていたものである。すなわち、光源氏の空蟬への手紙を媒介した小君（空

蟬の弟）、薫の浮舟への手紙を媒介した小君（浮舟の弟）などである。

『伊勢物語』や『源氏物語』のストーリーや人間関係を面影としてかすめながら、『南無阿弥陀仏』は書かれている。

### 6

『夏瘦』

#### 6・1 梗概

華族の令嬢である藤村ゆかり子は、絶世の美貌を誇っているが、その性は甚だ淫乱であった。彼女は、藤村家に仕えていた奉公人である貞潔な美代の夫・蓮田震策とも不義を働く。罪の子を妊娠したゆかり子の窮地を救うべく、美代はゆかり子の生んだ子を自分の子として養育する。ゆかり子は何の反省もないが、自分を愛してくれる裕福で愚かな夫と結婚して、幸福に暮らしている。

言わば、「悪徳の勝利」のストーリーである。「悪女小説」と言ってもよからう。注目すべきは、『源氏物語』が「悪徳の勝利」の物語としても読まれうることである。藤壺は、光源氏と不義密通して罪の子を出産した。ところが、その事実を隠し通し、自分を愛してくれる（愚かな）桐壺帝からの寵愛をほしきままにし、罪の子を帝位にさえ即けてしまうのである。光源氏も、罰されることはなかった。これをもって、『源氏物語』は「悪徳の勝利」を主題とする不条理の物語であると言い得る。尾崎紅葉は『夏瘦』で、藤壺と光源氏に批判的な立場から現代風に『源氏物語』を「翻案」することを試みているのだ。

#### 6・2 「ゆかり子」

さて、登場人物のネーミングから考えよう。「藤村ゆかり子」という名前は、「藤」という植物が「紫色」をしており、古来「紫のゆかり」という諺があるから思いつかれたものである。すなわち、『伊勢物語』四一段の、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武藏野の心なるべし。

の典拠となった、『古今和歌集』卷一七・雑上・八六七・読み人知らずの、

紫のひととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る

が、ここでは直接に意識されている。この和歌から、「紫のゆかり」という歌こ  
とばが発生した。この「紫のゆかり」を複雑な人間関係の一大絵巻に仕立て直し  
たのが、先述した『源氏物語』である。光源氏は、亡き母である桐壺更衣の「紫  
のゆかり」を藤壺に求め、その藤壺の「紫のゆかり」を紫の上に求めた。

『夏瘦』の「藤村ゆかり子」というネーミングは、何よりも「藤壺」と「紫の  
ゆかり」とを意識したものであったのである。さらには、華族ということから、  
「藤原」のもじりで「藤村」となったのであろう。

6・3 「いち早き風雅」

藤村ゆかり子は、十六の歳で、自家の車夫と男女関係を持った。その後、学校  
に入ったが、性癖は一向に改まらなかつた。

(ゆかり子は学校でさまざまの芸事を習ったが)百芸に替難き大瑕瑾は、い  
ち早き風雅をなんまたしける。此度はしのぶの乱れ限り知られず、己より落  
ちて校長の従弟に忍び、二月余りは人に知られず、後の事には何の思慮なく、  
只其日を楽しく暮せしが、……

この部分は、『伊勢物語』一段を踏まえて書かれている。

春日野の若紫のすりごろもしのぶの乱れ限り知られず

という和歌と、

昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

という語り手のコメントとを合成したものである。『伊勢物語』一段の和歌の  
「若紫」という言葉も、「藤村ゆかり子」というネーミングと響き合う。

『伊勢物語』一段は、美女を見た男の側の心の惑溺を歌っているが、尾崎紅葉  
は女の側から男に接近するというふうには、男女の力学を変型している。

6・4 「朧月夜にしくものぞなき」

校長の従弟とゆかり子の逢瀬は、次のように叙述されている。

春夜の風暖く、梨花雪と乱る、画堂の欄干に、薄月の曇れば我胸もとつぶ  
やく後に、いととき人がいつか忍びよりて、そつと肩に手をかけながら、巻  
たる小簾をずる／＼とおろし、朧月夜にしくものぞなきと、其ま、其処に転  
寝の折から、階子に音して同宿生が絵具皿を取に来しに、ふしだらを見られ  
て浮名忽ちにひろがれば、……

この場面は、『源氏物語』花宴巻の光源氏と朧月夜との逢瀬を下敷きにしてい  
る。そこでも、春の夜の密会が描かれていた。女が「朧月夜に似るものぞなき」  
と口ずさみつつ歩いて来ると、いきなり男から袖をつかまれる。

光源氏と朧月夜との間には「不義の子」こそ生まれなかつたが、やがて賢木巻  
で二人の仲は露顕してしまい、光源氏は失脚してしまう。

紅葉は、光源氏と朧月夜の馴れ初めと破滅を描く『源氏物語』花宴巻と賢木巻  
とを、合成して引用しているのだろう。なおかつ、「朧月夜に『如く』ものぞな  
き」に、「床に』敷く』ものぞなき」を懸けているのではあるまいか。

6・5 謡曲『葵上』

美代は、奉公している家のお嬢さんであるゆかり子とは似ても似つかぬ美しい  
心の持ち主である。藤村夫婦にもかわいがられ、内務省の官吏である震策との婚  
儀が整う。この震策の人となりについて、簡単に説明する件りがある。

震策は見た目もよい男だったので、宴会の席上では、芸妓たちから流し目をも  
らうほどであり、芸妓に持てない老人から揶揄されるほどであったという。

△瞋恚のほむらは「身をこがす」「思ひしらずや」「おもひしれ」と熟酔の老人  
までが濁声立ていやみの一節。

この部分は、謡曲『葵上』の一節を、そのまま引用している。光源氏を愛する  
六条御息所が、光源氏の正妻・葵の上を嫉妬するあまりに、生霊となって彼女を  
祟り殺す場面である。老人たちは、「男の嫉妬」によって、芸妓の人気を独占す  
る震策に崇つてやると、言っているのである。

まもなく、震策と結婚した美代は、自分の夫がゆかり子とただならぬ仲になつたと知り、一瞬の嫉妬に駆られる。ただし、「嫉妬すこしく静まりぬ」とあるように、美代は理性によって嫉妬をこらえて、藤村家の安泰を祈る心境に変わつてゆく。美代は、謡曲『葵上』の六条御息所にはならず済んだ。

ちなみに、明治文学における謡曲の引用としては、幸田露伴『一刹那』に、「火宅の門をや出でぬらむ」と口ずさむ放蕩息子を描く箇所があり、これもまた謡曲『葵上』からの引用である。

## 6・6 「一人子」

ゆかり子と震策との不義は、妊娠をもたらしした。墮胎をすら考慮している夫の醜態を見かねた美代は、ゆかり子を伊豆の修善寺で療養させ、極秘に出産することを計画する。そして、生まれた子は自分の子として育てようと、藤村夫婦に申し出る。ゆかり子の母親は、あまりのことに絶句する。そして、

心中には千万ゆかりの不届は憎かるべけれど、行末頼みなき一人子を持ち合せし、不運上なき此母の心を汲みて、なるまじき所を量見してくれよ。

と、すべての処置を美代に一任した。

「一人子」を思う「老いた母」という人間関係は、『伊勢物語』八四段で、

(在原業平は)「一つ子にさへありければ、いとかなしう(母宮は)したまひけり。

とされていた部分の借用(引用)だろう。

## 6・7 「人の親の心」

ゆかり子の母は、娘への愛に盲目になっている。だからこそ、美代の申し出を了承したのである。「夏瘦」の語り手は、

これも子ゆゑか、人の親の心は闇にあらねども。

と、コメントしている。この箇所では、『後撰和歌集』巻一五・雑一・一一〇

## 二・藤原兼輔の、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

という人口に膾炙した和歌を引用している。

この和歌はかなり有名なものであり、『源氏物語』で何度も引歌されているので、尾崎紅葉は『源氏物語』の読書体験によって記憶に刻印したという可能性が高い。「子ゆゑの闇」という諺にもなっている。

## 6・8 玉のような子

ゆかり子は、やがて「玉の如く光る女子」を出産した。『源氏物語』の桐壺巻で、桐壺更衣が「玉の男皇子」を出産したという記事と関連しよう。

ただし、場面的には不義の子の誕生を語っているので、『源氏物語』紅葉賀巻で、藤壺が光源氏との間の罪の子・冷泉帝を出産する件りを、強烈に指し示している。冷泉帝は、不義の子であるとはいえ美しく、「同じ光にてさし出でたまへば、瑕なき玉」とかしずかれた。

## 6・9 愚かな夫

ゆかり子は、何食わぬ顔をして、磯村法学士の妻となる。このゆかり子を盲愛する愚かな夫は、光源氏の子どもとも知らずに冷泉帝を抱く桐壺帝とも通い合うイメージである。ゆかり子は、わが子を美代の娘としたので、磯村が他人の子を自分の子と思ひ込んで抱くことはなかったのだが。

磯村は、何人もの男と関係したゆかり子を、「寝てもゆかり、寝てもゆかり」と大事にしている。だが、『夏瘦』の語り手は、ゆかり子を「二番煎じ」と侮蔑して憚らない。「紫のゆかり」の持つマイナス・イメージを、ここまで露骨に表現したのは特筆してよからう。

『源氏物語』の前半の最大の山場である光源氏と藤壺との不義密通は、「紫のゆかり」を求めてやまない光源氏の好き心(真善美への憧憬の念)から起こったのだが、尾崎紅葉は二人の「もののあはれ」ゆゑの恋愛劇を決して美化せず、客観的に観察している。むしろ、『源氏物語』を淫乱を推奨する「誨淫の書」として一方的に、非難しているのでもない。あくまで、『源氏物語』の世界を冷静に見ているのだ。それが、一見すると「悪徳の勝利」のように見えるが、すべて

を知っている人物がいる限りは、「悪徳の勝利」とは言えないという最後の結論部分につながってゆく。

ちなみに紅葉は、「新色懺悔」という小説でも、若い後妻を娶る老人を描いているが、「紫のゆかり」の手法を戯画化したものである。若い娘が、死んだ妻と「面影」が「寸分違はず」だったので、老人は長い独身生活に終止符を打って、年甲斐もなく彼女を後妻にしたとされている。『源氏物語』の「紫のゆかり」の高貴さを完膚なきまでに低俗化した紅葉の醒めた視線を感じさせる。

## 6・10 出生の秘密の暴露

『夏瘦』の語り手は、小説の終わりに際して、次のように述べる。

「土族蓮田震策長女震子しんこ」、幾度も繰返し肝に銘じて忘れたまふべからず。これは不義の子なり。震子は不義の子なり。

この言葉を発している語り手は、作中人物としての「著者〱われ」の友人である。この小説は、友人から聞いた実話を「著者〱われ」が筆記したという体裁である。だから、この最後の一節は、友人同士の会話なのである。けれども、作者から小説の読者たちに向けられた真実の告白でもあろう。

『源氏物語』薄雲巻で、光源氏との不義密通の過去を封印したまま、藤壺は死去する。何も知らずに帝位に即いている冷泉帝は、「夜居の僧都」から、自分が恐るべき「不義密通の子」であるという真実を告げられる。

『夏瘦』は、不義の子である震子本人に向けられた「出生の秘密の暴露」なのではない。けれども、尾崎紅葉は、「誰もが秘密にしておきたい不義の事実を白日の下にさらけ出す」という文学手法を、この『源氏物語』薄雲巻から学んだと推測できるのではなからうか。それが、若干の変型を伴って後年の名作『不言不語』を生み出す原動力となる。

『悪徳の勝利』で終わらせない（終わらない）結末なのだと言えよう。淫婦・ゆかり子も、姦夫・震策も、罪の子・震子も、愚夫・磯村も、そして善意からとはいえ悪に手を貸した美代も、すべての登場人物が「神の視点」から見下ろされている。尾崎紅葉は、彼らに直接の鉄槌を下して、ストーリーの中で彼らを破滅させることはしない。だが、読者は、「春秋の筆法」を感じ取るに違いない。そして、それこそが紅葉が『源氏物語』から学んだ手法なのではないかと思うので

ある。

## 7 『伽羅枕』

### 7・1 成立と梗概

尾崎紅葉は、淡島寒月によって井原西鶴の文学を知った。そして、西鶴の『好色一代女』風の歴史小説を構想した。それが、『伽羅枕』である。「おせん」という女性が、京の島原・江戸の吉原・信州・甲州などで送った激動の半生を淡々と描いたものである。

あくまでわたしの個人的な評価として、この『伽羅枕』はそれほどの名作ではないと考える。井原西鶴の文学的磁場に取り込まれて、そこから脱出し得ていない。全編を読者に一気に読ませる魅力に、いささか乏しい憾みがある。西鶴の『好色一代女』に比較すれば、ややストーリーの凝縮力が増しているが、それほどでもない。紅葉文学の神髄と現代的意義は、『伽羅枕』のような作風にはないのではないか。

にも拘らず、この小説の成立に際しては、近世の井原西鶴だけでなく、それ以前の古典文学の影響があったと思われるので、その指摘を行いたい。

### 7・2 「小萩」

旗本の水野石見守は、京に在動中、祇園の芸妓である小鶴こづるとなじみになった。小鶴が妊娠中に、水野は江戸に帰任することになった。形見の守り刀を残して、水野は去った。

これは、『源氏物語』で柏木が遺児・薫に「横笛」を残したことと対応する話型である。この「形見の品物」が手掛かりとなって親子の対面が果たされることもあるが、おせんが実父を訪ねた時に、彼は既に死去していた。このような、王朝物語から中世軍記・説話にいたるまで愛好された話型を採用して、『伽羅枕』は書き始められた。ただし、形見の品物の種類が一致しないので、『伽羅枕』における『源氏物語』横笛巻の引用は、「隠された話型の引用」に留まる。

さて、妊娠中の小鶴が、水野から別れ話を持ち出される場面に、

燈火とうひの小暗せくらき影に小鶴が泣顔は、露つゆけき小萩こはぎが夕月の下に枝を垂れたること

し。  
という比喩がある。ここは、『古今和歌集』卷一四・恋四・六九四・読み人知らずの、

宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つこと君をこそ待て

を引用しているのであろう。と同時に、この『古今和歌集』の和歌を引歌して書かれた『源氏物語』桐壺巻の世界をも踏まえているだろう。桐壺帝（旗本水野）の寵愛した「身分の低い后ニ更衣」である桐壺更衣（芸妓小鶴）は、あたかも「小萩」のような光源氏（おせん）を残して死去してしまふ。

『伽羅枕』では、子どもではなくて妊娠中の母親の方を「小萩」に喩えているが、構想として『源氏物語』桐壺巻と関連することは確かであろう。現に、小鶴は、おせんの生まれた年にはかない一生を了えている。

### 7・3 「蓑虫」の鳴声

別れを告げられた小鶴は、まもなく生まれるはずの子どもが、実父の顔を見られないことを悲しむ。その場面に、「人恥かしき父なし子に生れて、蓑虫の仇に啼くこそ」いたわしい、という表現がある。蓑虫は、父親を恋慕って「父よ、父よ」と鳴くというが、それは所詮叶えられない（仇な）願いでしかない、というのだ。

ここは、『枕草子』「虫は」の段に、

蓑虫、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれもおそろしき心あらんとて、親のあやしききぬ引き着せて、「いま秋風吹かむ折ぞ来むとす。待てよ」と言ひおきて、逃げていにけるとも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。

とある箇所を引用しているのである。直接『枕草子』でなく、慣用句となつていた常識の引用とも考えられるが、ここでは『枕草子』の引用だとあえて認定したい。それは、「父親から捨てられる子」が「おせん」であるという点、「鬼のよう

な苦界の母親から生まれた子」が「おせん」であるという点において、『伽羅枕』と『枕草子』との間に一致する構想力が指摘できるからである。「蓑虫」という言葉は、『伽羅枕』における『枕草子』引用の明瞭な痕跡であると理解したい。

### 7・4 小野小町

水野は小鶴に、苦界の女は老け込むのが速いというから、少しでも若いうちに金持ちに身受けされて幸福に暮らせ、と助言する。その言葉の中に、

其方は今年十九、今を真盛の花の色、移はぬ間に真実男を見出しなば、金銀姿色に目をくれず、早く見断りてさる男に添ふべきぞ。

とある。「花の色、移はぬ間に」の部分は、『古今和歌集』卷一・春下・一一三・小野小町、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

を踏まえている。それだけでなく、好色な噂の多かつた小野小町の和歌を、芸妓である小鶴の身の上に用いたことには、作者の意図（小町ニ小鶴ニ遊女）があつたことを照らし出す。

なお、『真実男』は、王朝物語では「まめをとこ」と表記される語だろう。

### 7・5 「玉」のような赤子

小鶴は、水野と別離後に、「玉を欺く女子」を産み落とした。それが、おせんである。ここは、桐壺更衣が、「玉」のような「男皇子ニ光源氏」を生んだ『源氏物語』桐壺巻の世界の連想の糸であろう。

ちなみに、尾崎紅葉は、『夏瘦』でも罪の子を「引用された話型の原型」では「冷泉帝ニ男児」だったのを「女児」に変型していた。ここでも、「引用された話型の原型」では「光源氏ニ男児」だったのを「女児」へと組み替えている。紅葉の文学的発想力の一面を垣間見ることができるようにも思う。

### 7・6 謡曲『井筒』

母となつた小鶴の年齢は、十九歳だった。いつまでも若く美しくいたいと願う

彼女の心は、「生涯十九廿歳に依然たき心願なるに」と書かれている。「十九」を「つづ」と発音している。

ここで興味深いのは、小鶴が勤めている店の名前が、「東井筒」という名前だということである。「井筒」と「十九(つづ)」とを紅葉の脳裏で結び付けた要因としては、謡曲『井筒』の世界があったと推定される。「つづはたち」は、中世や近世の作品に頻出する一般的な語句ではある(正しくは「十や二十」の意味だったが、次第に「十九や二十」の意味で用いられるようになった)が、「井筒」と結び付けたものは謡曲『井筒』に限定できるからである。

謡曲『井筒』は、『伊勢物語』一三段に想を得て、在原業平の妻だった紀有常の娘が亡夫を偲ぶという筋である。その中に、

結ふや注連繩の長さ世を、契りし年は筒井筒、

という一節がある。「契りし年はつづ(結婚した歳は十九)」と、「筒井筒」との懸詞である。紀有常の娘が十九歳の時に業平と結婚したという推測は、室町時代の三条西実隆の『伊勢物語系図』にも見られる説である。けれども、尾崎紅葉は、謡曲『井筒』を通して、「十九」と「井筒」とを関連させるレトリックを記憶したのだと思しい。

### 7・7 『土佐日記』

生まれたばかりのおせんは、親切な西岡夫婦に養女としてもらわれ、大切に育てられた。西岡夫婦に「手中の玉と大事がられ」たというのは、「掌中の玉」という諺を用いたものだろう。『源氏物語』の言葉(源氏詞)を直接に引用するならば、「袖の上の玉」(葵巻)や「夜光る玉」(松風巻)などとあるところである。だから、ここは『源氏物語』の引用ではない。

七歳八歳から女子のすなる遊芸の数を尽して、其々の師匠取して稽古を励みぬ。

とあるのは、紀貫之『土佐日記』の冒頭部分の、

男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり。

あたりを踏まえている可能性がある。

### 7・8 「有一節体」「拉鬼体」

おせんが幼時に学んだ去事の中には、「風雅の道」和歌もあつた。その師の名前が、「鴨某」であるのは、『新古今和歌集』時代の歌人であり和歌所の寄人だった鴨長明の名前からの連想が、紅葉に作用したからではなからうか。

和歌の師である鴨某は、幼い弟子のおせんを寵愛した。おせんは「才能は有一節体、容色は拉鬼体」と称賛し、「酔うても誉ることを忘れず」という溺愛ぶりだった。それが高じて、鴨某はおせんを自らの養女とするに至った。

さて、「有一節体」「拉鬼体」というのは、中世和歌における「歌体論」の分析用語である。「鴨某」のモデルと推定される鴨長明には歌論書として『無名抄』があるが、その中に「有一節体」「拉鬼体」という言葉は見当たらない。しかし、鴨長明と同時代の藤原定家の著作とされる歌論書の『毎月抄』には、次のようにある。

ただすなほにやさしき姿をまづ自在にあそばしたためて後は、長高様・見様・面白様・有一節様・濃様などやうの体は、いとやすきことにて候。鬼拉の体こそ、たやすくまなびおほせがたう候なる。

紅葉の意識したのが『毎月抄』だとは限定できないが、少なくとも中世歌論に淵源を有する特殊な言葉が『伽羅枕』で用いられていることは確かである。そして、鴨長明が歌論書を残した歌人であることまで、『伽羅枕』の登場人物のネーミングに際して意識された蓋然性が高いのである。

### 7・9 「春やむかしの」

西岡夫婦が経済的に没落して、おせんは鴨某に引き取られることになった。西岡夫婦は、長年住み慣れた我が家すら明け渡す。その場面。

春も見すばらしげに越して二月の初旬、庭に愛樹の紅梅昨日あたりより綻び初めて、例年よりも輪の見事なるに、縮まりたる我等が身の置所。主家退転の春に匂ふも憎しと、よしなきものに重次郎愚痴をいひかけて立出れば、女



房は其木の下に立寄りて別離を惜しみけるが、不図春やむかしのと、せんが常々好ぬる古歌を思ひ出してそゞろ涙を催せしが、(以下略)

ここでは、『伊勢物語』四段の、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身一つはもとの身にして

が引用されている。この『伊勢物語』四段は、「正月」の「梅の花盛り」に、「あばらなる板敷」で詠まれたものである。『伽羅枕』では、正月を二月に変更してある。これは、『伽羅枕』が江戸時代(幕末の頃)を舞台としているとはいっても、明治二十三年発表の小説なので、太陽暦を使っている明治時代の読者にとって「正月の梅」が連想しにくいからであろう。

「梅」「廃屋」「春やむかしの」という状況が、『伊勢物語』四段から借用された『伽羅枕』の趣向である。

#### 7・10 出生の秘密を告げる

おせんは、二度目の養父である鴨某に、親しまなかつた。彼女は、最初の養父である西岡を恋慕しているばかり。それで、鴨某は、おせんに向かつて、西岡が実の親ではないこと、実の両親はかくしかじかと告げて、彼女の心を西岡から引き離して自分に向けようとした。その場面。

鴨は進膝声を潜めて、天地の照覧を誓うて明かすまじき密事なれど、其方が疑念を齋さむばかりに語るなり。(中略) よしまた語るも益なき事と、今までは慎しみたれど、其方がさる事とも知らず、西岡夫婦を此の上なく懐かしがり、養家の我を厭ふゆゑに、物語りて聞かすも、(以下略)

おせんは、それを聞かされて、「冥加おそろしくおぼえ」という。

ここは、『源氏物語』薄雲巻で、夜居の僧都が冷泉帝に向かつて、その出生の秘密を告白する場面を換骨奪胎しているのである。本当の両親を知らない若者に對して、すべての真実を知っている老人が「秘事・密事」を物語る。この文学的趣向を尾崎紅葉は『源氏物語』薄雲巻から学んだと思われ、後には「不義の秘密を語る」ことから「殺人の秘密を語る」ことへと変更して、『不言不語』でも採

用することとなる。

#### 7・11 「蓬生の宿」「鳥辺山の烟」

それでも鴨某を厭ったおせんは、元の養父である西岡の許に戻ってくる。西岡は、豪邸を引き払って、「真葛原」の「蓬生の宿」に仮住まいをするほど零落していた。「蓬生」は、むろん『源氏物語』蓬生巻に由来する源氏詞である。

西岡の運勢は、しかしながら末摘花のように好転することなく、極貧のうちに死去した。「やがてぞ鳥辺野の烟となりける」とある。「鳥辺野」は、葬送の地として有名だから、「墓地」という意味の普通名詞とすらなっている。しかしながら『徒然草』七段の、

あだし野の露消ゆる時なく、鳥辺野の烟立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

に由来する徒然草詞でもある。

そういう点から言えば、『伽羅枕』の、

世の中の自由ならぬに呆れ、足摺りして帰りぬ。

という一節も、『伊勢物語』六段に由来する「足摺り」という伊勢詞を用いていることが知られる。

#### 7・12 「頼む蔭」「笹の葉」

おせんは、生きるために遊女となった。母親と同じ境涯になったわけである。そして、全盛期に身受けされ、お花と名前を改めたが、身受けしてくれた老犬尽が逝去してしまう。その場面には、「老木ながら頼む蔭を失ひ」という一節がある。これは、『源氏物語』宇治十帖で八の宮という庇護者を失った人々の途方に暮れた様子を連想させる「源氏詞」であると考えられる。

友人の薫も、娘の大君と中の君も、従者の門番たちも、皆が八の宮という庇護者を失って、茫然自失している。

お花の男運は悪く、その次に身受けしてくれた江戸の武士も、色硝子製法の開発に失敗して、失意のうちに死んでしまう。その場面に、

其冬の初霰笹葉に玉走る夕、(中略) 帰らぬ所へ赴きければ、

とある。ここは、『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」の中にある、

御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の  
霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思さるらめ、

という一節をかすめているように思われるのである。『源氏物語』では女性の華奢な美貌の比喩、『伽羅枕』では初冬の寂しげな叙景というように異なった文脈ではあるが、「霰」「笹」「玉」の三つの言葉の連合している点が、共通している。用語面での影響が想定されてもよいだろう。

### 7・13 お花の人生回顧

お花は、宿世拙い我が身を振り返る。「業平の様なる男」と結婚してもおかしくはない自分なのに、碌でもない老けた男たちの妾にされ、あげくの果てには財産も残さずに死なれてしまった。それが、恨めしい。実父・水野の娘である「異母姉」は、高家の奥方として幸福に暮らしているというのに。

「業平」云々は、当然に、彼が主人公である『伊勢物語』の享受である。その在原業平は、伝説では三千七百二十三人の女性と契った。その中から十二人の女性との恋愛を回顧したのが、『伊勢物語』の原型となる業平自筆日記だったというのだ。

お花が、自分は業平の妻になってもおかしくないと思うときには、『伊勢物語』の十二通りの恋愛遍歴の中から、「在原業平と小野小町」の恋愛が想起されていたのであろう。自分を「小野小町」とするセルフ・イメージを、おせんは抱いている。

お花の悲嘆を記して、

これも亦世を恨み身を敢果なみの種となりて、とかく涙雨は人の身の秋にふるものなりけり。

とあるのは、特定の一首には限定できぬものの、どこかしら小野小町の和歌に漂

う述懐と共通するものがあるようだ。お花は、小野小町の系譜に属する女性なのである。

### 7・14 宗兵衛という男

再び吉原に出ることになったお花は、佐太夫という源氏名を用いた。この佐太夫の客として、宗兵衛という謎の人物が通ってくる。彼は、反体制の活動家であるらしい。その素性は、まもなく佐太夫にわかるのだが、それまでの間は、サスペンス・タッチである。佐太夫は、「この四五日の中には素性を我から名乗せて見るべし」と思い、「お宅は何処ぞ聞かせ給へ」と言っても、男は「人生朝露の如し、草の葉末を転廻りて、何所を家此所と定むべき」と答えるのみだった。

ここは、『源氏物語』夕顔巻の世界の投影がある。佐太夫が夕顔で、宗兵衛が夕顔のもとに通ってくる正体不明の光源氏である。光源氏は、夕顔が彼の自宅を突き止めようとしても、容易にそれを明かさなかった。

なお、夕顔巻の影響がもう一箇所あるようだ。吉原きつての名太夫の二人の名前が、「玉屋の白露」と「大文字の花夕」とされているのは、『源氏物語』夕顔巻の、

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔

という贈答歌から発想されたネーミングであろう。

### 7・15 「配所」

このあとのヒロインの流転と流竄については、省略する。源氏詞・伊勢詞・徒然草詞などが綴れ織りになって展開してゆくのだが、本稿ではその一例だけ記すに留める。

「罪なくして配所の住居、眺めむ月もなければ花もなく」という一節が、『伽羅枕』にはある。これは、佐太夫が長持ちの中に隠れている状況を叙述しているのだが、『徒然草』五段の、

顕基中納言の言ひけん、配所の月、罪なくて見んこと、さも覚えぬべし。

を引用しているのだろう。源顕基の吐いた一世の名台詞は、諸書に見えるものが、本稿のこれまでの考察で既に明らかになったように、尾崎紅葉の愛読書の一つとして『徒然草』があったと思わねば彼の表現世界が説明できぬことから推して、この箇所も『徒然草』享受だと認定可能なのである。

## 7・16 おわりに

ヒロインは幕末と維新の時代を生き抜き、現在（小説『伽羅枕』執筆時点）も生存している、と結ばれる。今生きている老女の若かりし頃の物語を、「歴史小説」のスタイルで描いたものなのである。

数多く古典文学の言葉（＝古典詞）と語型とをちりばめてあるのだが、全篇を通読した印象がやや散漫であるのが惜しまれる。一つ一つのエピソードは興味深くないこともないのだが、大きな骨格が欠落しているのだ。

『源氏物語』や『伊勢物語』には、「一人の男性主人公の一生」という骨格がある。だから、何人もの（何十人もの）女性との恋愛遍歴を描いていても、散漫な印象は与えない。ということは、『伽羅枕』は、女性の物語であるから散漫なのだろうか。

わたしは不勉強で、井原西鶴の『好色一代男』と『好色一代女』の精緻な作品分析ができない。だから、男性主人公の場合には恋愛遍歴の長編が可能（容易）であり、女性主人公の場合には不可能（困難）である、という立論をすることはできない。また、近代文学の中で、『女の一生』タイプの作品群（或る女の波瀾万丈の生涯を語る小説）が続出できた秘密を、明らかにすることもできない。

ただ言えることは、尾崎紅葉のすべての作品を視野に収めた場合、『伽羅枕』は彼の代表作でもなければ五指にも入らないだろうということである。

## 8 『此ぬし』

## 8・1 梗概

帝国大学生の小野俊橋は、女嫌いで、弟の俊次と二人で質素に暮らしている。隣家に、薄井籠子という娘がいて、二階の窓から俊橋を眺めたり、垣根越しに覗いていたりする。籠子は、俊橋に好意を持っているのだ。籠子は、恋しい人の弟を手なづけて、本命の心を自分に向けさせようとするが、俊橋は勉強のために一

切無視している。

ある日、俊次の買ってきた吹矢を俊橋が吹くと、隠れて覗いていた籠子の目を射貫いてしまう。噴き出る血をこらえて籠子が立っていると、俊橋は自分が傷つけた責任を取って籠子と結婚することを誓った。

現代小説であるが、文体は擬古文を用いて書かれている。

## 8・2 典拠

「女が美男子を覗く」という趣向は、単行本『此ぬし』の巻頭に、『文選』の宋玉作「登徒子好色賦」が印刷されていることから明らかに、漢籍「登徒子好色賦」から想を得たものである。

ただし、どういう読書体験によって、尾崎紅葉の知識の中に宋玉作「登徒子好色賦」が宿ったのかについても、考えておかねばならぬ問題であろう。『源氏物語』「帚木巻の冒頭には、

光源氏、名のみことごとしう言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠るへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなざよ。

云々という一節がある。光源氏は「好色」という悪い噂が立っているが、実際には真面目な人物であって、本当に好色な人物からは嘲弄されてしまうような男なのだ、という趣旨である。

これと同趣旨で、好色という噂の人物が真面目で、他人を好色と誇る人物の方が好色なのだということを表現した古詩が、宋玉の「登徒子好色賦」なのだ。ある時、登徒子が宋玉を批判したが、宋玉は「自分は美女から垣根越しに覗かれても心を動かさないが、登徒子ときたら醜女を妻として満足している好色漢である」と論破した。

尾崎紅葉は、もしかしたら、『源氏物語』「帚木巻の冒頭部分」を讀書しているうちに、それと同内容の「登徒子好色賦」を思い出したか、それとも『源氏物語』「帚木巻の注釈書の中に「登徒子好色賦」を記載したものを讀んだのか、どちらかである可能性も皆無ではない。

むろん、唐代伝奇『鶯鶯伝』などの漢籍の読書体験から、そこに名前が出る登徒子のエピソードを記憶した可能性もある。だが、わたしとしては、『源氏物語』

帚木巻経由の知識である可能性を追求したいと考えている。そのうえで、美女から垣根越しに覗かれても心を許さなかつた宋玉のエピソードを逆転させて、遂に二人が結ばれたというハッピーエンドに仕立て直したのが、『此ぬし』であると想定したい。

### 8・3 龍子は十九歳

擬古文で書かれた『此ぬし』には、意外なことではあるが、これといって目立つ源氏詞・伊勢詞・徒然草詞は見当たらない。ただし、構想の中に、尾崎紅葉の古典文学への教養が昇華していることが推測されるのである。そのためであろうか、『此ぬし』は読者の心に残る佳作たりえている。

龍子の年齢が「今年お十九とやらにて」とあるのは、謡曲『井筒』で、『伊勢物語』二三段の紀有常の娘が夫の在原業平と結婚したのが「十九歳」だとされていることと関連があるのかもしれない。「龍子」というネーミングが、『伊勢物語』二三段の挿入歌の、

風吹けばおきつ白波龍田山夜半にや君がひとり越ゆらむ

を思わせないこともない。さらには、龍子の「原型」と思われる紀有常の娘の夫の在原業平は、『日本三代実録』の業平卒伝で「体貌閑麗」と表現されている美貌の持ち主だったが、「体貌閑麗」という表現は、『此ぬし』のヒントとなった「登徒子好色賦」に基づいた措辞である。

ちなみに、『源氏物語』帚木巻の段階で、光源氏の年齢は十七歳（一説に十六歳）である。三条西実隆『伊勢物語系図』では、十九歳の紀有常の娘と結婚した在原業平は十七歳と記されている。

『此ぬし』では、俊橋が二十四・五歳、弟の俊次は十三歳とされている。十九歳の美女と結婚する男性の年齢に関しては、『伊勢物語』とも『源氏物語』とも違っている。ちなみに、『此ぬし』の執筆は、尾崎紅葉が数えて二十四歳の時であった。登場人物の男の年齢は、作者の実年齢に合わせられたのだろうか。

### 8・4 恋しい人の弟を恋の媒介とする

龍子は、本命の俊橋が女性に対する厳しい姿勢を崩さないで、弟の俊次を手なづける。そして、彼の努力で俊橋と結ばれようとする。

これは、『源氏物語』で何度か使用されていた人間関係を組み替えたものである。すなわち、男が垣間見などによって、女を好きになる。けれども、女は容易に靡く気配がない。それで、男は女の弟（異母弟）を手なづけて、「文使い」を依頼する。弟は、尊敬する男のために姉へ手紙を届けるが、女は心を開かない。「光源氏・空蟬・空蟬の異母弟」と「薫・浮舟・浮舟の異母弟」という人間関係が、このストーリーの中を生かされている。

「小野俊次」という登場人物は、王朝物語の「ヒロインの異母弟」から発生してきた可能性がある。

### 8・5 片目を失明した龍子

「梗概」で記したように、龍子は、恋しい俊橋の吹いた吹矢で失明するという大きな代償を払って、俊橋と結ばれることが可能になった。本文の表現を用いれば、「隻眼の妻」「不具（の妻）」を俊橋は持つことになったのである。

この構想は、宋玉の「登徒子好色賦」に由来するものだろう。宋玉は、自分を好色と非難した登徒子の方が好色であり、その証拠として登徒子の妻は「蓬頭」「歴齒」「儻」「疥」「痔」の醜女なのに、登徒子は喜んで彼女を妻として交接している、と反論した。

『此ぬし』では、前半の「女が男を覗く」という場面では、宋玉の里の東隣の家的美女が垣根越しに美貌の宋玉を覗くという部分を利用し、後半の「男と女が結婚する」という場面では、登徒子が醜貌の女性を妻として満足しているという部分を利用して、宋玉の「登徒子好色賦」を完璧に利用し尽くして、『此ぬし』は書かれた。

ただし、隻眼であるものの妻は美しく、夫は決して好色ではない、夫の弟も兄と女の結婚を喜ぶというように、ハッピーエンドに収束している。

## 9 『むき玉子』

### 9・1 梗概

画家・大久保蘭谿は、偶然に月の下で沐浴する美女を垣間見て、猛烈な創作欲を掻き立てられた。その姿を再現した洋画を完成させるためには、どうしても裸体のモデルが必要である。蘭谿の弟子の蘭山の推薦で、お千代という女性がモデ

ルとして選ばれる。お千代は、よく羞恥心に耐えてモデルとしての使命を全うした。蘭谿の作品は、美術展で特選の榮譽に輝いた。お千代は、蘭谿の旧主君である老華族の妾になる運命を逃れ、蘭山の活躍もあり、めでたく蘭谿と結婚したのだった。

以上のような、ハッピーエンドのコメディ・タッチの小説である。現代小説であるが、「き」「けり」などの文末を持つ実に正統的な文語文である。尾崎紅葉は、『裸美人』では裸体画に執着する美術家を極端に戯画化して嘲笑していたが、この『むき玉子』では必ずしも裸体画に対する批判はない。山田美妙『胡蝶』（明治二十二年）の裸女の挿絵がセンセーションを巻き起こした二年後であるので、『むき玉子』執筆時点の紅葉には美妙へのライバル心は薄れていたのだろうか。

なお、「むき玉子」とは美女の真っ白い皮膚の形容である。ただし、紅葉は、ヒロイン・お千代の母親に、蘭谿の家を訪問する際の手土産として「玉子」を持たせるなど、タイトルと内容を関わらせる工夫をしている。

## 9・2 「小町貴妃」

大久保蘭谿は寡作であったが、創作活動を強く勧める弟子の蘭山の言葉で漸く「凶案」構図を捜し求める意欲を湧き立たせた。自分は非才であるがそれを恥じていては、何もできないで一生が終わってしまう。

なるほど一升に二升の水は入らず。われ悪女の姿にして小町貴妃の貌に及ばざるを愧ぢたらば、一生門外へは出られまし。

というのが、蘭谿の思いだった。ここで美女の代名詞として「小町小町」が挙げられていることに注目したい。

蘭谿が後にお千代をモデルとして描いた裸体画は、展覧会の話題を独占した。そして、観客は描かれたお千代の「裸美人」ぶりに感嘆した。そのことを、蘭谿は、彼女に向かつて、

衆人其方が写生の容色に憧れ、遍照が歌の様ならねど、まことに絵に画ける女人に心を動かす所の見せたければ、此より直に同道すべし

と語って、一緒に見に行こうと誘う。この部分は、『古今和歌集』の仮名序で、六歌仙が論評されている一節の、

僧正遍照は、歌の様は得たれども、まこと少なし。たとへば、絵に画ける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。

を踏まえている。実際、この「絵に画ける女を見て、いたづらに心を動」したのが、蘭谿の旧主君である老華族だった。

さて、この『古今和歌集』仮名序で、僧正遍照と並んで論評された唯一の女性歌人が小町小町である。

小町小町は、いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、強からず。言はば、よき女の悩めるところあるに似たり。強からぬは、女の歌なればなるべし。

尾崎紅葉は、この部分の仮名序をも意識して、『むき玉子』を構想していると思しい。蘭谿の旧主君の好きな老人が、お千代を妾に差し出すようにと仕向ける場面で、お千代が病を口実に逃れようとする。老人たちは、「裸美人」もよいが「病美人」もよいなどと、言いたい放題である。

病美人これは尚好し、風に傷める花の姿、艶麗なる奇観なるべし

などと男たちは口にしたのだが、『古今和歌集』仮名序の小町小町の作品観と通じ合うものがある。直接の表現が一致するのではないが、『むき玉子』の深層には「お千代」小町小町」とする発想があったことが推測できる。

## 9・3 行水する女を垣間見る

美術展に出品する作品の凶案を考えあぐねた蘭谿は、逍遙の途中で昼寝していたしか夜になってしまった。「夕月おもしろく」差し昇る宵に、ある人家を「垣隙より何心なく伺」うと、偶然に「年少女子の行水」する情景が目に飛び込んできた。女性はまもなく家に入ってしまったが、「好凶案」を得た蘭谿は「なほ忍ばしくて」、「如是と思はず木戸を押」したところ、「すつと音もせで明きしは天

の賜物」と思つて「忍入り」、しばらく「凶案」の確認をしていた。家から下婢が出てきたので、蘭谿は慌てて逃げ出す際に、体のあちこちを物につけて血まみれになってしまった。

この場面は、何よりも『源氏物語』花宴巻からヒントを得て構想されたのではなからうか。むろん、「月の下、神秘的な隠り沼で水浴している天女を漁師や猟師が目撃する」という神話・伝説のストーリーも意識されてはいたであろう。しかし、それよりも『源氏物語』花宴巻の影響の方が大きいのではないか。

光源氏は、「月いと明かうさし出でてをかしき」夜に、「なほあらじに」弘徽殿の細殿に立ち寄ると、「二三の口開きたり」という具合だったので、「やをら上りてのぞ」いてみた。すると、朧月夜という美女が歩いてくるのが偶然に見えたのだった。

『むき玉子』は夏七月、『源氏物語』花宴巻は春二月を描いているが、尾崎紅葉の脳裏では両者の対応関係がありありと意識されていたのではあるまいか。ただし、『源氏物語』では光源氏と朧月夜の間で男女関係が発生したのに対して、『むき玉子』の男は「凶案」を得ただけであり、男女関係は絵のモデルとなった女性との間で発生する。「一致」するだけでなく「相違」していることが知られる。これが、「古典文学の現代文学への翻案」のあるべき姿であろう。

そもそも蘭谿が寡作であったのは、傑作という世評の高い名画で既に剩すところなく描かれ尽くされている「名案」を、一番煎じに自分が「翻案」する勇気がなかったからだとされている。これは「名画」に仮託して、紅葉が自らの文学観を吐露したものと深読みできよう。『源氏物語』や『伊勢物語』という名作に剩すところなく表現され尽くしている「文学的趣向」を「翻案」するだけでは傑作は創造し得ないという認識が、ここでは表出されているのではなからうか。

尾崎紅葉は、明らかに『源氏物語』や『伊勢物語』や『古今和歌集』などの古典文学に強い影響を受けている。言葉の面でも、ストーリーの面でも、登場人物の配置や場面設定の面でも、古典と紅葉作品との間には照応関係（影響関係）が多数指摘できた。しかし、紅葉には紅葉の工夫があつて、単なる「翻案」では終わっていない。その一例が、この蘭谿の垣間見の場面なのである。

なお、蘭谿が血まみれになって逃走する場面の構想は、『伊勢物語』六三段からヒントを得たのではなからうか。老女が恋しい男を垣間見していると、家から男が外出するそぶりを見せる。狼狽した老女は、「うばら・からたちにかかりて」家に走り帰った、という。『むき玉子』の戯画化された蘭谿の逃走劇は、『伊勢物

語』六三段の「翻案ならざる翻案」あるいは「翻案を超えた翻案」ではないかと思われる。

#### 9・4 志賀寺の上人

蘭谿が裸体画のモデルを必要としているのを察した弟子の蘭山は、友人の大学生の隣家に住んでいるという女性（お千代）に白羽の矢を当てる。蘭山は、美しい女性に心を動かす性癖のある大学生から、お千代の評判を耳にしていたからである。それで、「蘭山 ↓ 蘭山の友人 ↓ 友人の下宿の女房 ↓ その下宿の近隣に住むお千代の両親 ↓ お千代」という順序で「モデル勤め」の話が伝わる。いろいろと込み入った事情があつたものの、両親の金銭的欠乏を救済するため、お千代は羞恥心を捨てて蘭谿の裸体画のモデルとなることを承服する。

この場面でのみ登場する「蘭山の親友」は、お千代を蘭谿の家に連れてくるために機能する端役である。しかし、彼が下宿の女房（おかみさん）に話を持って行かねばすべてが実現しないので、大切な役回りではある。

蘭山の依頼を、友人はなかなか承服しない。自分は、天下国家を論じているのに、女性の話題は失礼だろう、と言うのだ。蘭山は、

惜むべし、貴君は昨日の貴君にはあらず。もし依然たる昨日の貴君にして、及ぬ恋を志賀寺の上人と同じ思ひに、なほありたらむには、此媒介が縁となりて言葉をも交はせ、御手をも得握らむものを、我人を鑿るの明なく誤りて清耳を汚したる不念さ。

などと語つて、友人の好き心に訴えて、媒介を依頼することに成功した。この蘭山の言葉の中の「及ぬ恋を志賀寺の上人」の部分は、「及ばぬ恋をし（する）」と「志賀寺の上人」との懸詞である。

志賀寺の上人とは、高貴な京極御息所（藤原時平の娘で宇多天皇に入内した藤原褒子）に身分違いの恋慕をした僧のことである。京極御息所はゴシップの多い女性として有名であり、『源氏物語』夕顔巻で夕顔が陸院の物の怪に取り殺される場面は、この京極御息所をモデルとしていると言われる。

志賀寺の上人と京極御息所とのゴシップに関しては、さまざまの説話集や歌論書に見える。紅葉は、謡曲の詞章を通して、このエピソードを知ったのであろうか。老いさらばえた老僧が、美しい御息所を一目見て、その手を握らせてもらっ

たという話である。「むき玉子」の「言葉をも交はせ、御手をも得握らむものを」という部分は、このエピソードを踏まえて書かれている。

『むき玉子』には、別の箇所、外国の「或やむごとなき御息所」が、画工に自らの裸体画を描かせたというエピソードも紹介されている。外国の王妃であるものの、「御息所」という古語が用いられたのは、「京極御息所」の連想の糸が作者の脳裏にまだ残存していたからではないかと思われる。

## 10 『恋のぬげがら』

### 10・1 梗概

隣同士の幼なじみである千之助とお初との、結ばれそうで結ばれぬ悲恋を描いた小説である。これも、尾崎紅葉が好んだ『伊勢物語』二三段の「筒井筒」の翻案と認めてよいだろう。

家が没落した千之助は、出家して日周と名告る。この日周と、お初とが再開する場面が、クライマックスである。

ちなみに、これほど紅葉が愛好した『伊勢物語』二三段の「翻案」であったけれども、近代文学史は、『伊勢物語』二三段の「翻案」の最高傑作として樋口一葉「たけくらべ」に最初の指を屈している。紅葉は、一葉の後塵を拝してしまったのである。なぜなのか。紅葉における「翻案」の意義と限界について、詳しく考察することが研究者には望まれている。

### 10・2 還俗

日周は、還俗してお初と世帯を持つかとまで考える。これは、文学作品としてよくある趣向なのではあるが、深読みすれば『源氏物語』の巻々と通い合う側面が発掘できる。

仏道修行を固く決心したり、俗世間のすべてが心の奥底から嫌になった結果としての「出家」ではなく、成り行き上の出家であったので、日周の心はお初を前にして乱れに乱れる。

『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」で、一時の激情に駆られた女性の出家は後々後悔を残すだけであるとされている箇所が、まず想起される。ついで、『源氏物語』宇治十帖で出家した浮舟の前に薫が出現して、彼女の「還俗」を強

く申し出る箇所が想起される。

『源氏物語』では、「出家した女性の生きがたさ」や「尼が道心を貫くことの困難さ」に力点があった。それに対して、尾崎紅葉は出家した（元色男の）僧の側の心の乱れを描いている。むしろ、「源氏物語」と『恋のぬげがら』を絶対に響き合わせなければならぬ論理的必然性は存在しない。ただ、文学史に関心を持つ読者ならば、同じ「出家」と「還俗」を描きながら、どうして王朝物語では女性の側に視点が置かれ、近代文学では男性の側に視点が置かれるのか、興味を抱かずにはいられないだろう。

例えば、先程その書名を示した樋口一葉「たけくらべ」の信如と美登利のその後はどうなるのか。成人した信如は、父親と同じように墮落して、遊女となった美登利の客となるのか。美登利よりも、信如の今後に不安を感じる読者も多かるう。そしてまた、ここでも「還俗」についても紅葉と一葉との「翻案」の質の差異の解明が必要だと思われるのである。

なお、夏目漱石の『行人』で描かれている知識人・一郎の内面は、まるで「浮舟が男になったら、しかも最高の知識人になったらかくもあろう」という不安な人生を生きている。大きな見通しを提示しておけば、現代文学では再び「女性の視点」へと回帰したと思われるのだが、近代文学においては「男性優位の視点」から文学作品が組み立てられている。明治時代は、男性が文学を担った時代であった。それは、江戸時代の文学者のほとんどが男性だったというのは、全く次元が異なる。

### 10・3 手紙の露頭

日周は、お初恋しさに、自分の本心をありのままに綴った手紙を書く。宛て名まで書いたが、それを投函する決心はできない。それで、自分の腹巻の下に隠し入れたままにしておいた。ある朝、手紙が腹巻からはみ出ているのも気づかずに日周が眠りこけていると、弟子僧の仲間の一人がそれをひっぱり出して読んでしまう。結局、それが師僧に届けられ、日周は信州の山寺へと放逐されてしまったのである。

この場面は、これまた各種の文学作品に類出する趣向ながら、『源氏物語』若菜下巻に学んだものと想像したい誘惑に駆られる。女三の宮は、密通相手である柏木からもらった手紙を「御袴の下」にさしはさんでおいた。それが、「御袴のすこしまよひたるつま」から覗いていたのを光源氏は見とがめて、引っ張り出し

て読んだ。すると、柏木の女三の宮に寄せる思いがそのままに何も隠さずにしたためられていたではないか。これが、女三の宮と柏木の運命を一変させてしまう。女は出家に追い込まれ、男は死去してしまふ。

『源氏物語』では、女の側の不注意であり、男からもらった手紙が露頭してしまふ。『恋のぬげがら』では、男の側の不注意を描き、男が女に出そうとした手紙が露頭する。両者には、共通点と相違点とがあり、だからこそかえって、わたしは「翻案」であると認定したのである。紅葉における翻案とは、王朝物語の趣向の全面的な踏襲ではなくて、「改変」を意味しているからである。ただし、「翻案」のレベルが、初期作品の段階では例えば樋口一葉の「翻案」のレベルには達していないのである。

尾崎紅葉の代表作は、『金色夜叉』『多情多恨』『不言不語』などであろう。それらの分析は、本稿では行いえない。いずれ続稿を予定しているが、紅葉文学の神髄を示す傑作小説群における「古典文学の翻案」のレベルの測定が最大の眼目となろう。

## 11

## 『鬼桃太郎』

## 11・1 「角の束の間も」

『鬼桃太郎』は、昔話『桃太郎』のパロディである。「鬼ヶ島」に申し子として生まれた鬼桃太郎が、桃太郎に復讐しようとして失敗するというストーリーである。挿絵が、はなはだ面白い。

さて、鬼ヶ島で暮らす爺がいた。彼は、城門の衛司まがひつか(古語「衛士」の当て字だろ)だったが、桃太郎に城門を打ち破られたことをずっと心にかけている。

何日は身の罪を償うて再び世に出でむことを心懸け、子鬼の角の束の間も忘る、間ぞなかりける、

この文章は、『新古今和歌集』巻一五・恋五・一三七四・柿本人麻呂の、

夏草の牡鹿せじかの角の束の間も忘れず思へ妹が心を

などの「牡鹿の角の束の間も」という和歌的レトリックを用いて、「牡鹿の角」を「子鬼の角」へと変改したものである。巧みな駄洒落である。

## 11・2 ゆきゆきて

鬼桃太郎は、人間世界に向かって進軍を開始した。

但々ゆきゆくて鬼ヶ島の堺に來りたる頃、魔風遽に颯々と吹荒み、

天候が一変し、毒龍が現れ、鬼桃太郎の家来となることを申し出た。おそらく、この文章は、『伊勢物語』九段の、

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。(中略)

なほゆきゆきて、武藏の国と下つ総の国との中にいと大きな川あり。

という構文を利用しているのだと思われる。

この『鬼桃太郎』は他愛のないパロディではあるが、このように「歌ことば」や「伊勢詞」をちりばめつつ語られている。尾崎紅葉の遊び心が縦横に溢れている異色作である。

## 12 おわりに

岩波書店『紅葉全集』の第一巻と第二巻に収録されている初期作品群(明治二十四年までの創作)を、古典文学との照応関係に留意しながら分析してきた。近代文学の黎明期に、古典文学を取り込みながらも、それを改変して、独自の文学世界を創出しようと試みつつけた文学者・尾崎紅葉の出発点を、ひたすら凝視してきた。

『源氏物語』や『伊勢物語』や『徒然草』や和歌についての該博な知識を持った若者が、まず「文学者」として自立するまでの助走期だったと言えよう。このあと、尾崎紅葉は、短い人生の中で、『金色夜叉』を筆頭とする名作群を量産しつづけた。また、その作家活動の中で、明治二十八年に、活字となった博文館の日本文学全書シリーズで『源氏物語』全文を熟読含味するというところも行っている。



る。恐らく、それが最初の『源氏物語』体験だったというよりも、それまでの散発的な『源氏物語』体験の完成だったのだろう。そうでなければ、紅葉文学の初期作品の「源氏詞」の多さは説明できない。

本稿につづいては、紅葉文学を不朽の名作たらしめた作品群の分析に入りたいと念願している。『金色夜叉』『多情多恨』『不言不語』は、いずれも現代小説でありながら、語彙の面でも、人物造型の面でも、主題の面でも、『源氏物語』との角逐を最大のテーマとしている。『源氏物語』の研究者の視点からの尾崎紅葉論が、是非とも必要なのではないか。

尾崎紅葉の文学が復活する時、明治時代中期の「言文一致」運動によって方向が固定してしまった現代文学の混迷が打破され、二十世紀の文学が新生する瞬間が訪れるのではなからうか。堅苦しいわりには小説を読む喜びがほとんど読者に感じられない「純文学」という狭隘な概念から、人々はやっと解放される。文体も自由で、内容も楽しく、それでいて「深い人生の真実」が描き取られている文学。それこそが、二十世紀に期待される文学であろうが、その再生の大きなヒントとなるのが、何よりも尾崎紅葉の作品群だとわたしは直感する。「源氏物語」という日本文学の最高傑作を読み慣れた目で近代文学を読んだわたしの鑑識眼が、そう告げている。「小説」という近代文学の限定された一ジャンルが現代日本にもっとも復活しうるとしたら、それは尾崎紅葉の文学のエッセンスが二十世紀風に転生しえた時ではなからうか。そのためにも、紅葉が最も意を注いだ古典文学との格闘について、深い認識を持つ必要があると思うのである。そうであれば、現代人は尾崎紅葉と格闘することもできないであろう。格闘のないところに、真の意味での「享受」はない。

(平成十二年四月十九日 受理)

## Archaic and Poetic Words in Ozaki Koyo's Early Works

Keiji SHIMAUCHI

### Abstract

This paper indicates concretely the sources of distinguishing words in Ozaki Koyo's works.

In his early works, Ozaki Koyo employed lots of classical words found in those Japanese classical works;

1. *Genji Monogatari*
2. *Ise Monogatari*
3. *Tsurezuregusa*
4. *Kokin Wakashu*
5. *Makura-no Soshi*

Koyo's main literal background was a good knowledge of Japanese classical works. "Modern literature" of the 20's of the Meiji Era is decisively influenced by "Classical literature."

キーワード：尾崎紅葉、『紅葉全集』第一巻、『紅葉全集』第二巻、源氏詞、伊勢詞、徒然草詞、古典詞、歌ことば